

【漁況】 【マアジ】

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しました。しかし、平成11年には大きく減少し21万1千トンとなり、平成14年は19万2千トンでした。

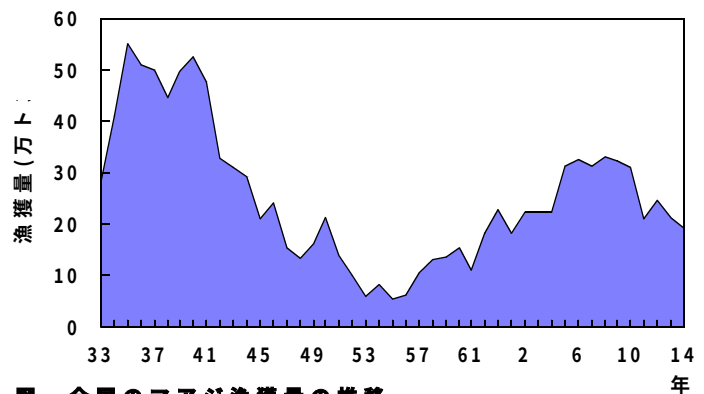


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成16年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、阿久根沖～野間池沖（1～2月）、甕周辺（1～3月）に漁場が形成されました。

薩南海域では、内之浦沖（1～2月）、佐多沖（1～3月）に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、豆アジ(1歳魚・平成15年生まれ)主体に1,440トンの水揚げで、前年の171%及び平年の137%でした。

3. 平成16年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、豆・小アジ(1歳魚・平成15年生まれ)で、来遊量は前年を上回り、平年並みとなるでしょう。

（根 拠）

主対象の豆・小アジ(1歳魚)は、平成15年には前年・平年を下回り推移していましたが、16年1月以降には漁況が好転しており、現在の来遊量は低調であった前年を上回り平年並みの水準であると考えられます。

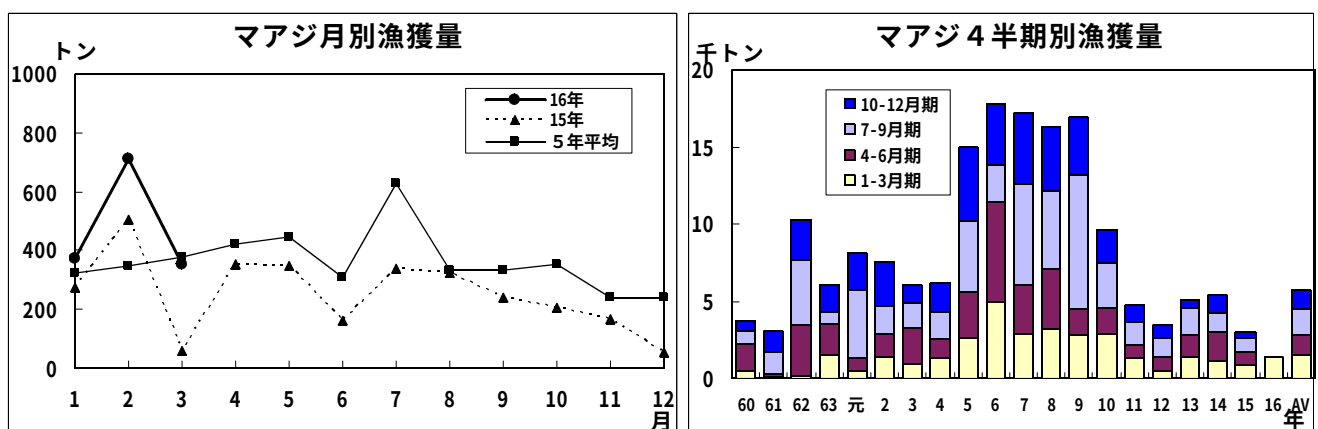


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成11～15年）の平均値、平成16年3月末までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんが、昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンと増加しましたが、その後再び減少し、平成14年には27万9千トンでした。

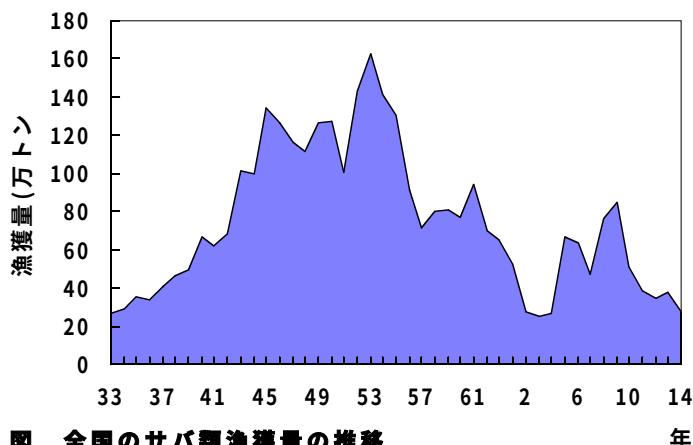


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 平成16年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

薩南海域では、ゴマサバ中(2・3歳魚)主体で馬毛島沖・島間沖(1～2月)が主漁場となり、内之浦沖(1～2月)、種子島南(2月)、種子島北(3月)にも漁場が形成されました。

北薩海域では、ゴマサバ中(2・3歳魚)主体で甑西(1月)に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ中(2・3歳魚)主体に2,756トンの水揚げで、前年の206%及び平年の130%でした。

3. 平成16年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中主体(2・3歳魚)で、大サイズの漁獲もあるでしょう。来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

(根 拠)

主対象となるゴマサバ中(2歳魚)の本県海域への来遊は、近年では最も高い水準で、漁況は黒潮の離接岸等の海況条件にもよりますが、今後も産卵期を終える5月頃までは、本県海域での漁獲がまとまると考えられる。

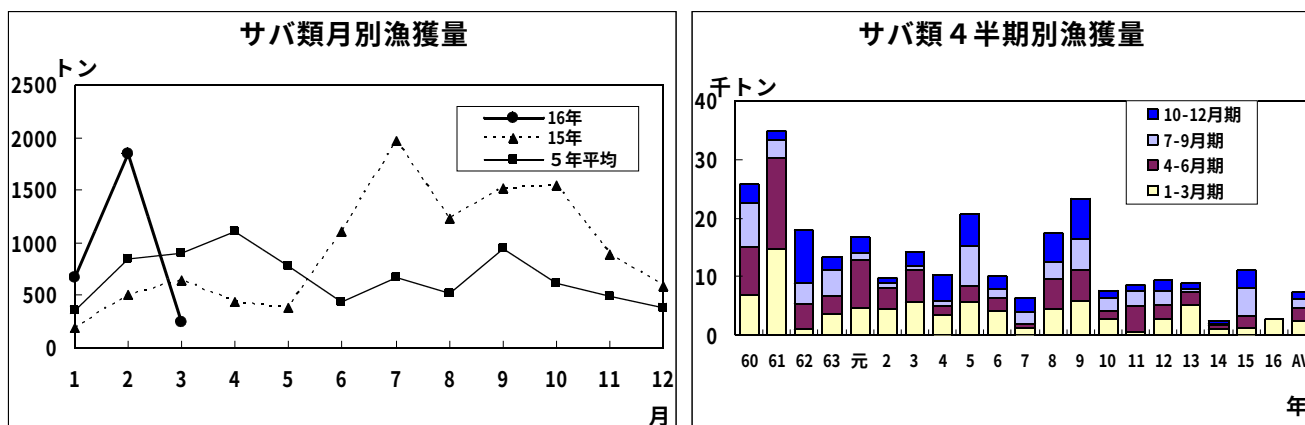


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成11～15年)の平均値、平成16年3月末までの水揚量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成14年は5万2千トンでした。

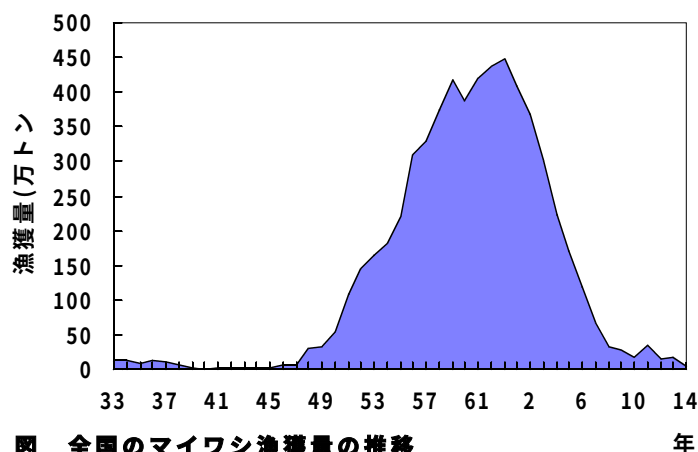


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 平成16年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

期間中まとまった漁獲はありませんでした。

3. 平成16年4～6月期の見とおし

来遊量は前年並みでまとまった漁獲は、期待できないでしょう。

（根 拠）

マイワシの資源状態は全国的に低水準にあり、前期の漁獲状況や平成16年3月の卵稚仔調査結果の状況から資源回復の兆候はみられませんでした。

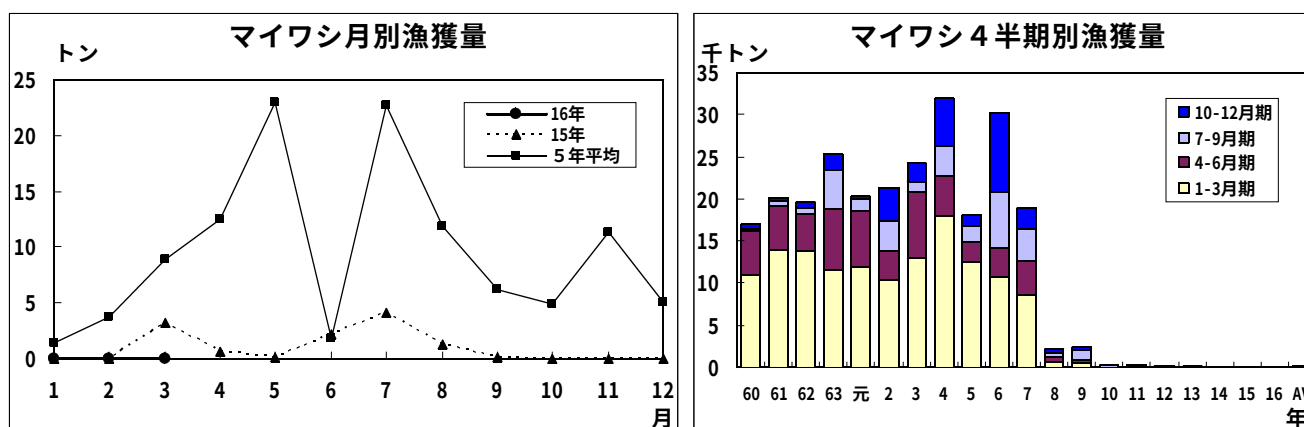


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※ 平年値は過去5年（平成11～15年）の平均値、平成16年3月末までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成9年は5万5千トン、平成14年は2万7千トンでした。

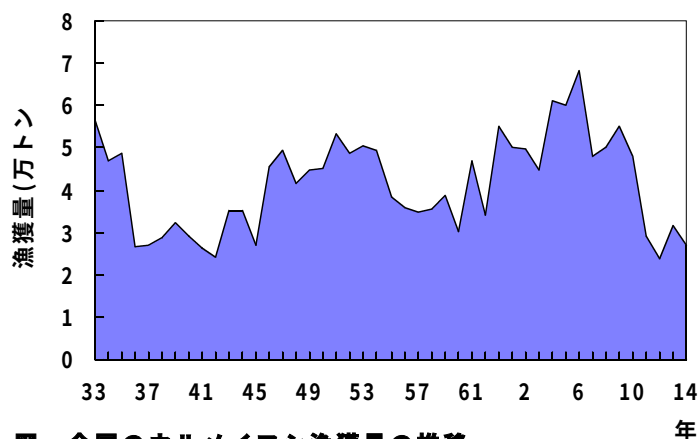


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成16年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

主に北薩海域の阿久根・長島沖(2月)で中大羽(1歳魚)主体の漁獲がありました。

まき網4港計及び棒受網の合計では、121トンの水揚げで、前年の98%及び平年の97%でした。

3. 平成16年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は小羽ウルメ(0歳魚・平成16年生まれ)で、来遊量は前年を上回り、平年並みとなるでしょう。

(根 拠)

前期に棒受網で産卵親魚がまとまって漁獲されており、当歳魚の発生量は、低調であった前年を上回ると考えられます。

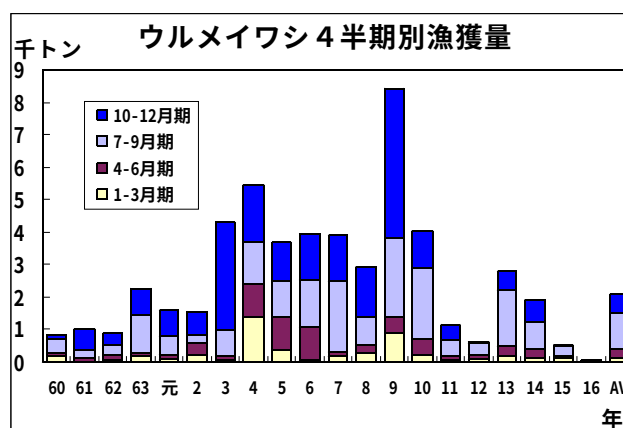
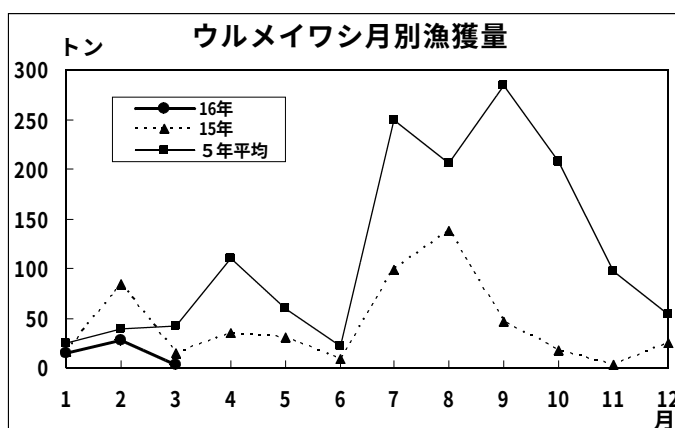


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成11～15年)の平均値、平成16年3月末までの水揚げ量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し平成9年は23万3千トン、平成11年は過去最高の48万トンとなりました。平成13年は、30万トンと一時的に減少しましたが、平成14年は再び増加し44万トンでした。

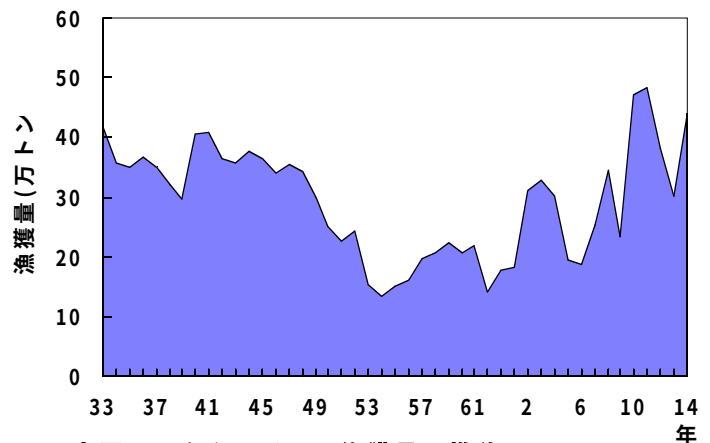


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成16年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

主に北薩海域の長島沖（2～3月）、甕島東（2月）、薩南海域の開間沖・野間池沖（2月）で中大羽（1歳魚）の漁獲がありました。

まき網4港計及び棒受網の合計では、320トンの水揚げで、前年の336%及び平年の85%でした。

3. 平成16年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は大中羽カタクチ（1歳以上）で、来遊量は前年を下回り、平年並みでしょう。（根拠）

前期の漁況の経過から主対象となる大中羽の来遊状況は、平年並みであると考えられます。

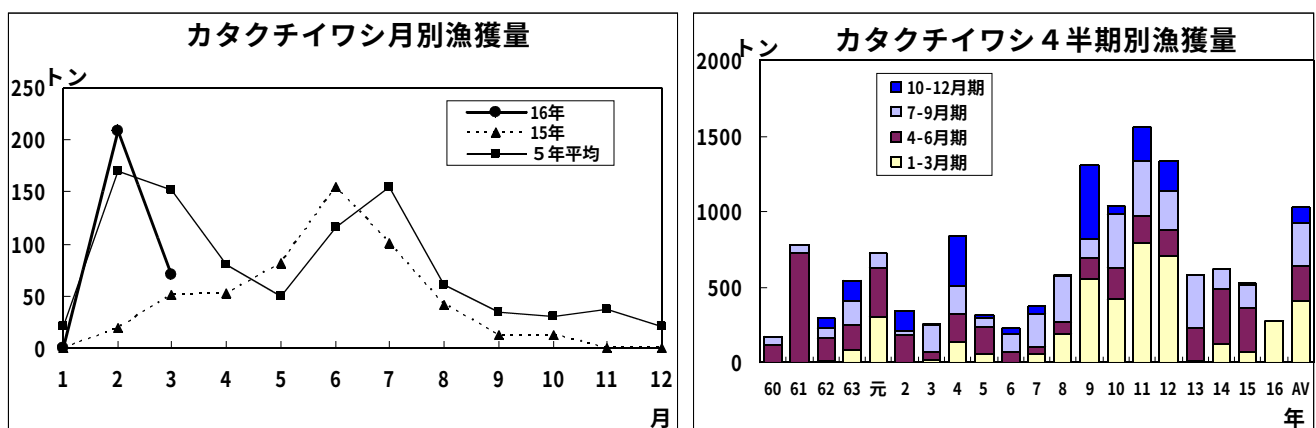


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成11～15年）の平均値、平成16年3月末までの水揚量を使用。

【その他の魚種】

〈ムロアジ類（４港計）〉

1. 経年変化及び平成16年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに減少傾向を示し、平成12年は、昭和58年以降最低の1,819トンとなりました。平成13年以降は増加し、平成13年は3,224トン、平成14年は4,418トン、平成15年は3,369トンとなりました。

平成16年1～3月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では921トンの水揚げで、前年の79%及び平年の107%でした。

2. 平成16年4～6月期の見とおし

来遊量は前年を下回り、平年並みでしょう。

〈オアカムロ（４港計）〉

1. 経年変化及び平成16年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに減少し、平成6年には1,823トンとなりましたが、その後は増加傾向となり、平成10年は3,413トンでした。その後、減少傾向となり、平成13年は2,337トン、平成14年は1,885トン、平成15年は1,255トンとなりました。

平成16年1～3月は、主に薩南海域で漁獲があり、月期全体では437トンの水揚げで前年の104%及び平年の55%でした。

2. 平成16年4～6月期の見とおし

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

〈マルアジ（アオアジ）（４港計）〉

1. 経年変化及び平成16年1～3月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、平成2年以降低調に推移しましたが、平成7年には1,430トンに増加しましたが、再び減少し平成11年は639トンでした。平成12年以降は増加傾向を示し、平成12年は1,867トン、平成13年は1,603トン、平成14年は2,712トンでした。

主に西薩海域で漁獲があり、期全体では74トンの水揚げで、前年の9%及び平年の14%でした。

2. 平成16年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ中（2歳魚・平成14年生まれ）で、来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

例年主対象となるマルアジ豆・小（1歳魚・平成15年生まれ）の来遊量が低調であるため、漁況は低調に推移すると考えられます。

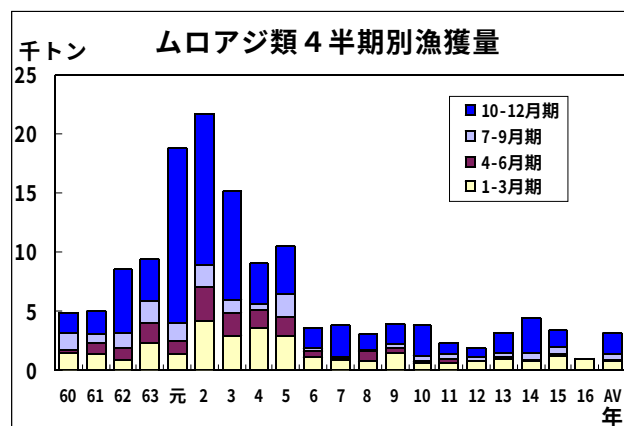
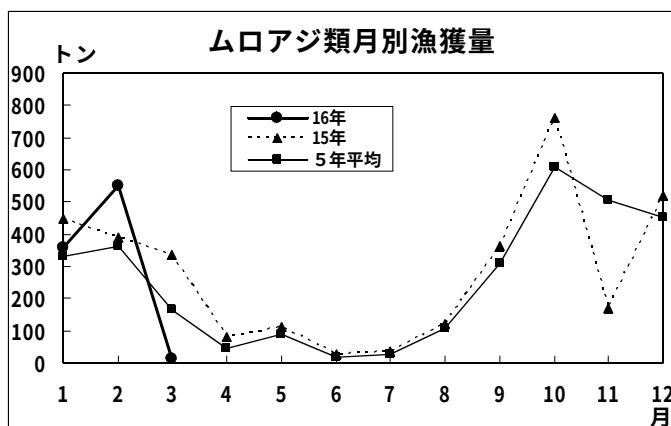


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

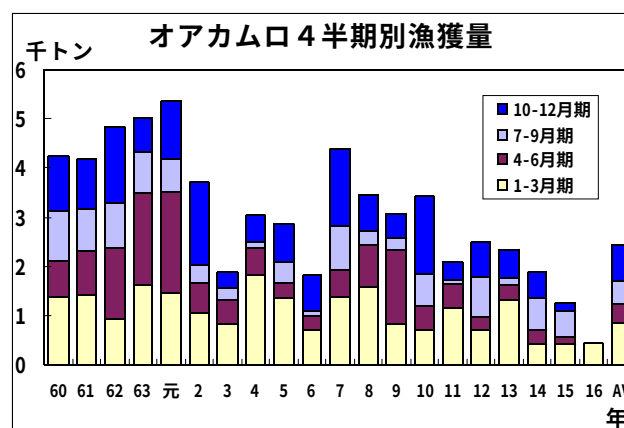
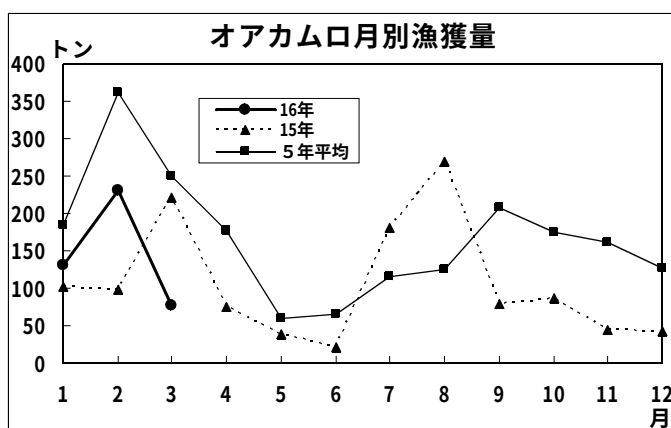


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

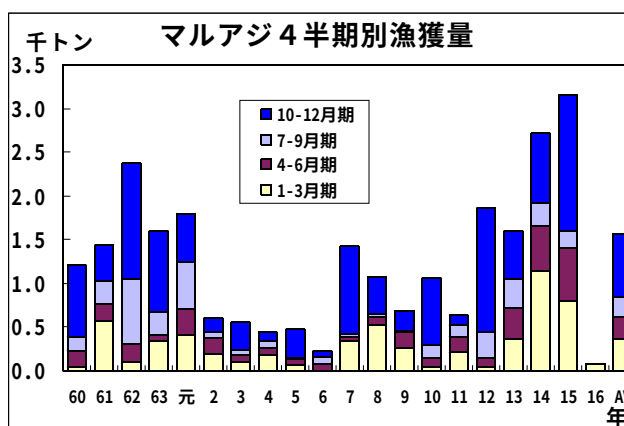
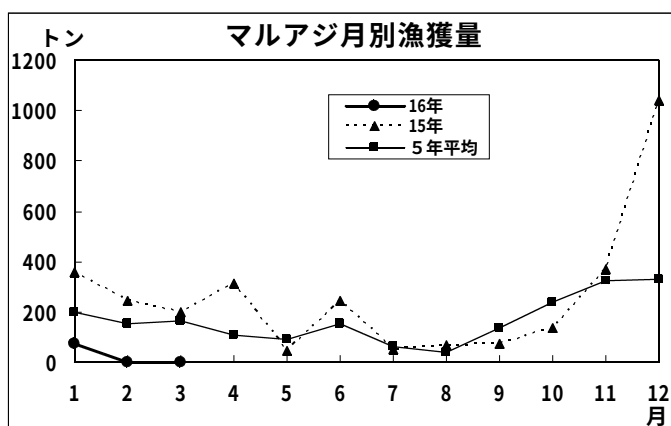


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成11～15年）の平均値，平成16年3月末までの水揚量を使用。

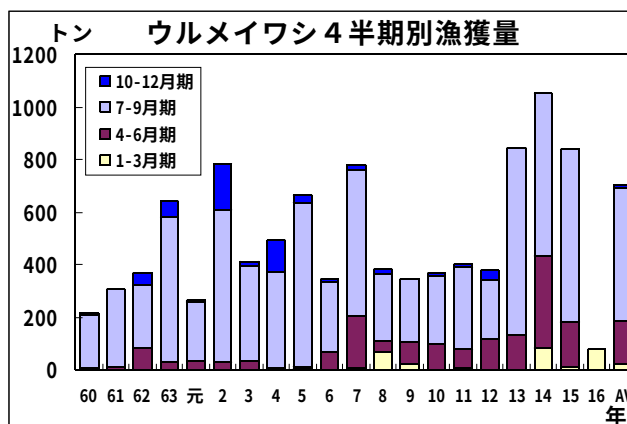
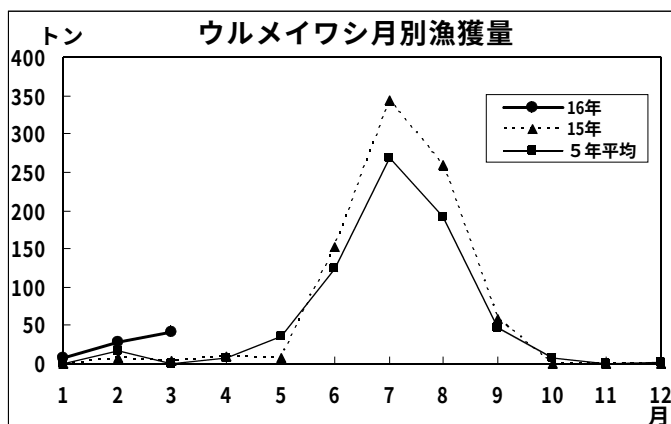


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

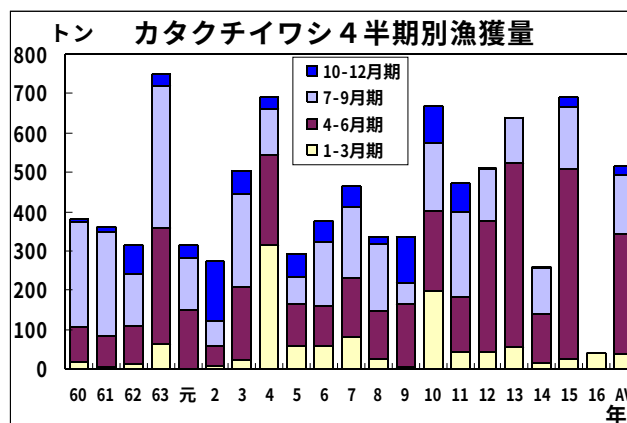
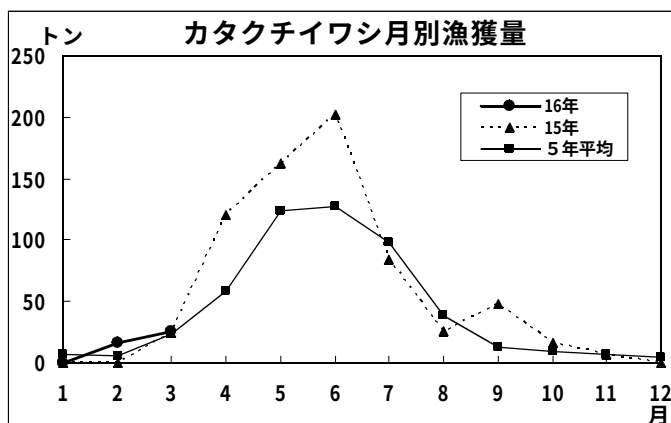


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

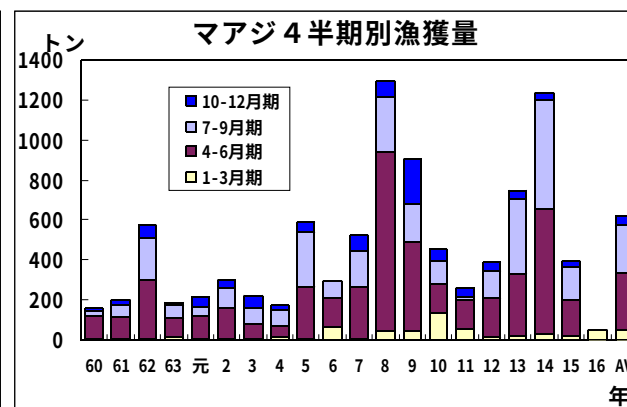
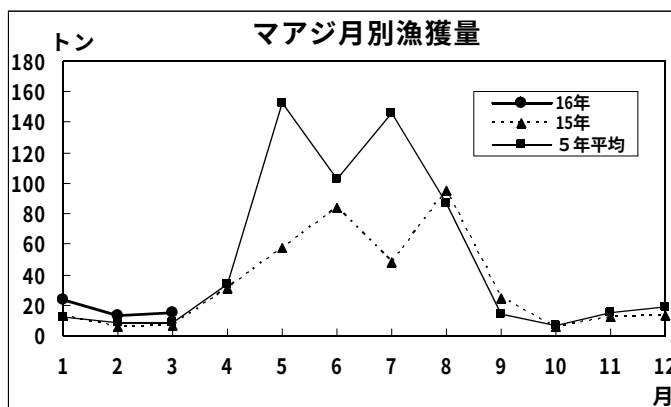


図 マアジ定置網漁獲量変化(内之浦港)

※平年値は過去5年（平成11～15年）の平均値，平成16年3月末までの水揚量を使用。